

題目 「健全な食習慣形成をめざす食育に関する一考察—家庭と連携した食育を中心に—」

指導教官 山口健二

発表者 竹内由希美

## I. 題目設定の理由

近年、食の多様化や生活環境の変化などによって、子どもたちの食習慣が変化してきている。子どもたちが健全な食習慣を形成するためには、学校でどのように取り組んでいけばよいのか、家庭とどのように連携していけばよいのかについて考察したいと思い、本題目を設定した。

## II. 論文構成

第一章 子どもたちの食習慣の現状と食育の必要性	第一節 熊本県上天草市立上小学校 「おしゃもじクラブ」
第一節 調査に見る食習慣の現状	第二節 茨城県取手市立六郷小学校 「朝ごはんメニューレシピコンクール」
第二節 食習慣形成の意義	第三節 宮城県石巻市立中津山第二小学校
第二章 学校における食育の推進	第四章 食育推進に向けた学校づくり
第一節 食育基本法の成立と栄養教諭制度	第一節 子どもたちに興味関心を抱かせる 教材研究
第二節 食育における家庭との連携の必要性	第二節 6年間を見据えた教育課程のあり方
第三節 家庭と連携した食育における手だて	第三節 教員連携の必要性
第三章 健全な食習慣形成を目指す家庭と連携した取り組み	

## III. 論文の概要

### 〈第一章 子どもたちの食習慣の現状と食育の必要性〉

第一節では、朝食の欠食、肥満・痩身傾向児、孤食についての現状を報告した。第二節では、第一節の現状を受け、食習慣形成の意義を考察した。一度身についた食習慣を変えることは難しく、子どもの頃に健全な食習慣を形成することが求められる。

### 〈第二章 学校における食育の推進〉

第二章では、学校教育ではどのような食育を推進していく必要があるのか、家庭と連携した食育を中心に考察した。まず、第一節では、食育基本法の成立と栄養教諭制度について述べた。栄養教諭の職務は、主に食に関する指導、学校給食の管理をすることであり、栄養教諭を中心として教員が連携し、食に関する指導に係る全体計画を基に、学校全体で食育に取り組むことが求められている。第二節では、家庭と連携することの必要性について考察した。子どもの健全な食習慣を形成するためには、学校での子どもたちに向けた食育に加え、家庭と連携した食育に取り組むことが求められる。それは、子どもたちにとって最も身近な生活環境である家庭において、継続的に取り組むことが必要であるからだ。また、食の意味や必要性を、子どもだけでなく保護者も一緒に知る必要がある。よって、学校は、家庭に積極的に働きかけ、家庭と連携を図りながら取り組まなければならない。第三節では、第二節で述べた家庭と連携することの必要性を受け、家庭とどのように連携していくのか、連携する上で大切にしたいことを3つ述べた。それは、家庭の状況を把握すること、情報や意見を交換し合うこと、保護者と子どもと一緒に活動できる場を作ることである。これらのことを大切に、学校と家庭が共に取り組んでいくこ

とが求められる。

#### 〈第三章 健全な食習慣形成を目指す家庭と連携した取り組み〉

第一節では、熊本県上天草市立上小学校の「おしゃもじクラブ」を紹介した。この取り組みの内容は、栄養教諭と保護者が、子どもたちが実際に食べる給食の献立を考えるというものである。このことが、家庭での食事について振り返る良い機会となり、参加者は食について一生懸命考えるようになったという。第二節では、茨城県取手市立六郷小学校の「朝ごはんメニューレシピコンクール」を紹介した。この取り組みの内容は、夏休みに親子で朝ごはんのメニューを考え調理し、それをレポートにまとめ、PTA役員などによる審査を実施するというものである。各家庭のこだわりが感じられ、保護者と一緒に朝ごはん作りをした児童にとっても、食材の栄養や調理の方法などへの興味・関心が高まったという。第三節では、宮城県石巻市立中津山第二小学校を紹介した。この学校では、栄養教諭を中核として、各教科や道徳・特別活動における食に関する指導の改善、家庭への啓発活動、アンケートの実施による望ましい食生活や食習慣の推進などを行っている。このような取り組みにより、子どもたちの食材や食事に対する関心を高めることができ、保護者の食への関心を喚起することもできたという。

#### 〈第四章 食育推進に向けた学校づくり〉

第四章では、食育を推進していくための学校づくりについて、3つの観点から考察した。第一節では、子どもたちに興味関心を抱かせる教材研究について述べた。子どもたちが食に興味・関心をもてるように、親しみやすく、自ら体験しながら学ぶことができるような教材、環境を考えることが大切である。また、地域との連携を図ることも必要であり、学校では体験できないような活動を取り入れたり、授業に参加していただくなどの取り組みをすることが考えられる。子どもたちの実態、発達段階などを考慮しながら教材研究をしていくことが大切である。第二節では、6年間を見据えた教育課程のあり方について述べた。子どもたちが健全な食習慣を形成するためには、学校教育全体を通じて、そして継続的に食育を行う必要がある。子どもたちが、様々な場面で学んだこと、それまでの学年で感じたことや学んだことを結びつけながら、自分の食習慣を継続的に見つめることができるようにすることが大切である。第三節では、教員連携の必要性について述べた。第一節、第二節で述べたような学校づくりをしていくためには、学級担任、栄養教諭、養護教諭、校長などが連携・協力し、子どもの実態などの情報を交換し合いながら取り組むことが必要不可欠である。

#### IV. 今後の課題

本論文では、健全な食習慣を形成するためには、学校教育全体を通じて取り組むこと、学校と家庭が連携して継続的に取り組むことの大切さについて述べてきた。この研究を通して学んだことを基に、子どもたちや保護者の思い、そして家庭と一緒に取り組んでいくという姿勢を大切に、積極的に取り組んでいきたい。

#### V. 主要参考文献

- ・上田信男編、『学校栄養教育概論 学校における食の指導』, 2007, 化学同人
- ・古谷千絵, 『食育現場からのメッセージ』, 2007, ぎょうせい